

第四部 皆で語る未来

「安心して暮らせるまちを目指す」。地域・学校・行政が連携した取組を行い、防災力の強化に取り組む「秋津校区防災連絡会」の皆さんと、小学校での炊き出し支援をおし、たくさんの方の住民を勇気づけた「城南町豊田校区婦人会」の皆さん。地震の経験を風化させることなく、貴重な教訓としてこれからの防災・減災に生かしていくために、未来に向けて何を備えるべきかを語ってもらった。



自助・共助・公助による 「地域防災力」



今こそ災害に強い まちづくりを

(前列 写真左から)

吉住 洋三さん	秋津校区防災連絡会事務局長
島崎 克也さん	秋津校区防災連絡会副会長／校区青少年協議会
濱砂 名言さん	秋津校区防災連絡会会長／第2町内自治会長
梶尾 典子さん	秋津小学校校長
高崎 憲一さん	秋津校区防災連絡会副会長／第7町内自治会長
漆野 和也さん	東区総務企画課主査

(後列 秋津校区防災連絡会メンバー 写真左から)

吉村 和俊さん	第5町内自治会長
志勇 猛さん	第2・1町内自治会長
工藤 修一さん	第3町内自治会長
山中 幸喜さん	第4町内自治会長
橋本 博幸さん	第9町内自治会長
福田 聖司さん	第1町内自治会長(※写真未掲載)

秋津校区防災連絡会

熊本地震の教訓を踏まえ、「自助・共助・公助」による地域防災力の強化を目的として平成30年4月に設置。千人規模の防災訓練実施や、内閣府「地区防災計画」の策定に向けた支援対象地区」に選ばれるなど、先進的な取組を行っている。

行政に頼るばかりでなく自分たちで生き延びなければ

—— 発災当時のことを教えてください

漆野 東区の震度は、前震6弱、本震6強。益城とほぼ同じ揺れが来たにも関わらず、注目されるのは隣町の

益城ばかりでしたね。

濱砂 私が自治会長をしている町内は約200世帯のうち、全壊が約40世帯、亡くなった方も出ています。

島崎 地震直後は電気が止まり、娘がコンサートで使うペンライト片手に、家族と一緒に避難場所の公園へ向かいました。かろうじて毛布は持ち出したのですが不安で……。そんな時に濱砂さんが、「大丈夫ですか!」と声をかけてくれて。あの時は、ほっとしましたよ。

吉住 みなさんもだと思いますが、この地震で初めて「前震」というものの存在を知りました。私は、防犯協会連合会に所属しているのでパトロールの要請があり、5月10日まで毎日2回、秋津小への見回りをしましたね。

濱砂 市に電話をしても対応してもらえず……。たぶん30回はかけたかな……。

高崎 行政を頼るばかりではないかという思いからみんなで立ち上がり、援助が必要な方は助け合うようになりました。

島崎 メディアは来るけど行政からの支援は来ないという状況でしたね。

高崎 避難所の司令塔もいなくなつたんですよ。そんなとき、学校の教頭先生が立ち上がってくれて、卒業生に指示してプールの水をトイレ用に運んでくれました。

つらい経験をしたからこそ私たちは立ち上がった

—— 秋津校区防災連絡会が立ち上がった経緯を教えてください

高崎 避難所の状況はどんどん変わっていきます。最初は、目の前で配給が終わっても仕方ないねと心に余裕があつた

けれど、避難生活が続くとどんどん疲弊していく。毎日弁当ばかり、プライベートもない……。そんな経験や、自分たちで何とかしないと、という思いから、この「秋津校区防災連絡会」が立ち上がり、こうやって活動しているんです。

島崎 避難所では、感動することもありました。市外から支援物資を運んで来てくれた若い人たち。さらに、子どもたちも自主的に仕事をしてくれるなど、若い人たちに心を支えられました。これからは若い人も含めて、もつとみんなに、防災に関心を持つてもらわないといけないと思いました。

——「秋津校区防災連絡会」ではどのような活動をされていますか？

漆野 私が東区の防災担当として消防局から出向してきたのは、平成29年4月。最初の1年ほどは、みなさんに叱られ続けていましたが、みなさんからの言葉を全て聞き、受け止めると、信頼していただけるようになりました。災害に強い地域を目指し、みなさんと一緒にチームの一員として、「秋津校区防災連絡会」の設置に取り組みました。

濱砂 平成30年4月に「秋津校区防災連絡会」を立ち上げ、秋津に合うマニュアルを作成してきました。

高崎 避難所の運営のこと、ごみ置き場のことなど、色々考えました。地震だけではなく、水害のことも想定しています。

漆野 そして、マニュアルを作るだけでは機能しないので、平成31年4月に秋津校区で1000人規模の防災訓練を行いました。その時に「尽力いただいたのが梶尾校長先生です。学校と協力してできたのが本当によかった！

梶尾 地震後から、学校では月に1回は訓練を行っていたのですが、日中に地震が起きた場合を想定すると、

地域の人は学校に避難しますが、学校側は一度子どもたちを親元に帰さないといけないんです。そこで行ったのが、子どもたちを保護者へ引き渡す「学校避難訓練」と、避難してくる方々の受入れなどの「地域避難訓練」。この2つの訓練を同時に行うのは珍しいことです。

——マニュアルを作り、実践したことで見えてきた課題と、今後について教えてください

漆野 この訓練は、熊本でも先進的な、社会実験的な取組です。それが、秋津ではみなさんの協力でできました。

吉住 課題は山積みです。土地勘のない人にも分かる避難ルート、避難所の受付のこと、町外の人や外国の方が来たらどうするか……。とにかく、避難所は落ち着く場所でないといけないので、丁寧な対応が求められます。

マニュアルを通して未来のために地域が繋がる

吉住 訓練で見えてきた課題からマニュアルに肉付けしていき、「作るだけではなく誰でも使えるように」しないとダメですね。世代交代の時期も迎えているので、継続させるために次世代へ引き継がないといけない。そのためにも、シンプルさも大事です。

梶尾 今回の訓練では、若いお父さんたちの参加が多くて、「地域の人の顔が分かった」という声がありました。子どもは、普段の生活から地域の人を知っています。親は分からないことも多く、こういった機会が大切です。漆野 こんな先生がいてくれることがありがたい。学校が子どもに語ってくれると、それを子どもが親に語ってくれる。子どもたちを中心に考えれば、親も動くんです。

高崎 今回の親御さんは共働きが多くて忙しいからね。その辺はどうか？

梶尾 地域に出るきっかけが少なく孤立していますね。ですが、授業参観に来るお父さんたちも増えてきていて、「子どもを守ってくれる地域に関心を持つ」というのはちよつとした橋渡しをするだけで良いと思いますし、この秋津校区は特にできると思いますよ。

島崎 保護者が忙しくなっているのは事実。忙しいときには参加できないかもしれませんが、顔が見えるというのは大事。子どもを介して親御さんが出てくれるようにする。いろんなパターンを用意しておくことが大事ですね。

梶尾 訓練をして、マニュアルによって地域がつながるといいですね。

漆野 そうですね！ こんな活動や考え方ができるのが秋津校区です。秋津校区は内閣府の「2019年度地区防災計画の策定に向けた支援対象地区」に選ばれ、現在はみなさんで「地区防災計画」の策定に向けて取り組んでいます。秋津校区は市の防災をリードする存在で、地域と学校、行政が連携した取組を全国に広めたいです。

吉住 みんなが自分事として積極的に参加する、そんな組織でありたいですね。

漆野 「楽しく」するのも大事。なんで災害に強いのか？ それは、日頃から地域の行事が盛んで、顔見知りが多いからです。

吉住 秋津がこれだけ強い絆で結ばれているのは、「秋津をこよなく愛する人」が多いから。それが、災害に強い町になるんです。

地域で続けた 炊き出し支援



「熊本の女性は強い」と感じた

(写真左から)

松本 加代子さん	豊田校区婦人会	沈目地区支部長
小夏 美紀子さん	豊田校区婦人会	陳内地区支部長
村山 淳子さん	豊田校区婦人会	会長
岩下 壽真子さん	豊田校区婦人会	副会長
森本 美奈子さん	豊田校区婦人会	鵜瀬地区支部長

城南町豊田校区婦人会

40～70代の約60人の会員で構成される婦人会。普段から様々な地域の行事に参加。熊本地震後は約2週間、避難所となった豊田小学校で炊き出しを行い、たくさんの方の住民を勇気づけた。

家屋倒壊は免れたものの見えない恐怖と戦った数日

——地震直後の様子などを教えてください

村山 食器は割れ、壁のクロスにヒビが入り、本震後2～3日は車中泊でした。

森本 我が家は被害が少なく、電気もすぐ復旧したので家の中で寝泊まりできました。

松本 家の中はぐちゃぐちゃ。余震のたびに瓦が滑り落ちて危険だったので、3台の車に家族で分かれて車中泊を2週間。日中も、怖くて家の中で食事をする気にはなりませんでした。

岩下 うちも瓦の被害や余震で、1週間は車中泊。水は出るけれど濁っていて使うのが怖かったですね。

村山 この地区は井戸水を使っているので、その被害がひどかったです。茶色い水が出るから使えなくて……。

小夏 うちは前震後から車中泊をしていましたが、義父母が怖がり、本震後は避難所で過ごしました。

森本 確かに、台風とは違っていつ揺れるか分からないし……高齢者の心労は特に大きかったですね。それから、場所によっては道路が通れないところも多く、混乱したと思います。

松本 倒壊は免れても、半壊判定が出た家屋も多く、中には4割の住民が戻ることが出来ない地域も。同じ校区でも、被害は大小異なりました。

炊き出しをすることで自分たちの気分転換にもなった

——炊き出し支援をはじめたきっかけは何ですか？

村山 本震直後、近所の市職員の方から、「避難所にはすぐに食料が来ないと思うから、どうかしてほしい」と個人的に頼まれたんです。そこで婦人会メンバーに相談して、16日の朝から避難所になつていいる豊田小学校で炊き出しをはじめました。最初は、副会長の岩下さんとそれぞれ家で作ったおにぎりなどを持ち寄って提供し

たと思います。16日は約30名分用意しましたが、その後、避難される方が増えて、多いときで約150名分の食事を、朝晩1日2回。こんな時だからこそ、1日1食は手作りの食事、しかも温かいものを食べて欲しいという気持ちがあつたんです。家族に作る食事と同じ感覚です。

森本 私は16日の夜から参加しました。その時は、非常食のアルファ米やパンも1人1個もない状態だったので、温かいものが食べられることに、みなさん驚かれていましたね。

村山 できる人が交替で炊き出しを担当していました。

森本 今思えば、村山さんのように「やりましょう!」と手を上げてくれるリーダーがいてくれてよかったです。みんな何かしたい気持ちはあつたので。

——それぞれ、被災している中での炊き出しは大変ではなかったですか？

松本 確かに、家の片付けなどありましたが、当時は家にいるよりも、みんなと過ごす時間が安心できたんです。小夏 まだ余震もひどかったし、いつ倒壊するか分からない家にいるよりも、みんなと炊き出しをすることで、心が救われました。

岩下 家に籠っていたら気が滅入っていたかも……。

森本 そうそう、大変だったけど、みんなで笑って過ごしていましたね。ああ、婦人会に入っていて良かったって思いました。

村山 一緒に頑張ってくれたメンバーの中には、残念ながらその後亡くなってしまった方もいるのですが、当時は

みんなで心をひとつにして取り組みました。

松本 亡くなった方の1人と仲が良かったのですが、私が炊き出しに参加したのは彼女がいたから……。

村山 そうやって私たちが、前向きな気持ちで炊き出しを行っていると、避難所の方達も次第に前向きになっていったんです。婦人会メンバーは1回に7〜8人集まっていますが、避難されている方々にも手伝って頂きました。それが、とても嬉しかったです。

岩下 学校側の協力もありがたかったです。すぐに水やガスを使わせてもらったり、衛生面のアドバイスもらったり。私たち任せではなく、学校も避難所の人たちも一緒に炊き出しを行った感じです。今も学校との繋がりはあり、行事や読み聞かせなどのお手伝いをしています。

村山 特に気を付けていたことは、生野菜の消毒をしつかりするなど、食中毒防止や衛生面のこと。炊き出しは、避難所が集約された5月上旬まで、毎日夢中で行っていたので、終わって空虚感があつたほどですよ。

顔が見える関係は「安心」に繋がる

——防災への取組や意識は変わりましたか？

村山 熊本地震から4年近く経ち、復興も進み、記憶も薄れがちです。自治会ではハザードマップを作成したり、災害時の役割分担を決めています。年に1回防災訓練を行った方がいいと思います。

小夏 正直、危機感は薄れていると思います。年に1回訓練があつて、みんなで参加すると、忘れないかも。

村山 校区単位で行えば、自分の役割が見えてくるかもしれません。それと、災害は地震だけではないので、様々な自然災害に対して考え、備えないといけないと思います。こうやって婦人会で話して、お互い防災意識を確かめ合うの必要がありますね。

森本 あとは高齢者のことを考えないといけないと思いました。当時、炊き出しは各地で行われていたけれど、お年寄りにはその情報がなかなか届かなかったようです。

小夏 確かにね。若い人はネットとかで情報を見つけられるけど……。

森本 豊田校区のような小さなコミュニティの利点は、「あそこに行けば誰かおらす」という感覚で、高齢者も集まってくれる。そこに私たちのように顔見知りの人がいると安心に変わるんです。顔見知りだと、連絡や安否確認もすぐできますしね。

小夏 いざというときに繋がれると安心ですし、そういった意味でも、もつと若い人も婦人会に入ってくるといいんだけど(笑)。

村山 忙しいのはみんな同じ。婦人会も、堅苦しいものや強制するものはないし、今の時代に合ったスタイルになつていないことを伝えていかないとダメですね。

岩下 婦人会は大事な地域のコミュニティ。いざという時に一枚岩になつたら強い。

森本 この大変な地震を笑って乗り越えられたのは、婦人会のおかげ。「熊本の女性は強い」と強く感じました。